

中国希望小学訪問から学んだこと

前北京日本人学校 教諭

鳥取大学附属小学校 教諭 浦田文久

キーワード：現地理解

1. はじめに

平成20年（2008年）の3月21日、3年ぶりに北京から日本に帰国した。成田に着いたときは、小雨のせい空気湿度が湿っていて日本の空気を感じた。北京は、1年中乾燥した空気だったのでこの湿った空気がとても懐かしく感じられた。空気の次に日本を感じたのは、空港内の売店であった。子どもたちは、日本の漫画雑誌を懐かしそうに手に取っていた。私たち大人は、自動販売機に感動し、早速缶コーヒーを購入した。空港から東京のホテルに移動すると、コンビニがあったので、遅い夕食を購入した。北京にも日系のコンビニはあり、よく利用したが、やはり日本の食べ物はとてもおいしく感じた。目にする景色が全て新鮮で、日本の良さを実感した。

帰国して4ヶ月が過ぎ、中国での生活の実感が薄れようとしている。今のうちに中国での生活を記録に残しておきたいと思う。特に、中国の貧困農村地域にある希望小学を訪問したときのようすについて報告したいと思う。

2. 活動の実際

(1) 希望小学とは

希望小学とは、北京日本人会が、建築費を寄付して（10万元＝160万円）建設し、その後の運営は現地に任せている学校である。建築する地域は、日本人会が決めるのであるが、基本的に貧困農村地域である。近いところで北京から3時間で行ける距離のところに建設されたものもあれば、何百kmも離れた西安に近い距離のところにある希望小学もある。これまでに10校が建設されている。教育内容はもちろん中国の教育課程にもとづいて運営されている。私は、幸運にも下見を含めて6回希望小学を訪問する機会を得た。どこも日本の30年から40年前の風景を思わせる景色が広がっていた。たいてい夏の訪問であったので見渡す限りトウモロコシ畑が広がっていた。



〈希望小学の校舎〉

(2) 平成19年度（2007年度）の訪問から

平成19年度は、8月2日から4日という2泊3日の計画で、北京から3時間くらいのところにある希望小学に出かけた。近くには「避暑山荘」という世界遺産があり、行く途中には、「司馬台」という万里の長城の一部が見られるところでもあり、魅力あふれる場所にあった（もちろん、希望小学自体は貧困地域にある）。この地は日本人学校が3年連続訪れている希望小学で、子どもたちも毎年私たちの訪問を楽しみに待っていてくれた。

朝6時に学校を出発した。途中事故による渋滞に巻き込まれ、3時間で着くところが、5時間近くかかってしまった。ただ、こういうことはよくあり、3年間の訪問で予定どおり着いたことは一度もなかった。到着は遅れたが予定どおり午後1時から訪問の開校式を行った。その中で寄贈品を学校に送った。文房具や遊び道具などである。北京日本人学校の子どもたちが集めたアルミ缶や紙などのリサイクル活動で得られた資金で買ったものなども含まれ

ている。開校式に引き続いて私たち日本人学校教員による授業がスタートした。

授業はできるだけ中国語で行おうという伝統にもとづいて実施されている。ただ、日本語で通常行うような授業はなかなか難しい。どうしても活動が中心になる。次のような予定で3日間の授業は行われた。

〈3日間の予定〉

一 日 目	13:30～14:00	オリエンテーション ワンポイント日本語学習	
	14:00～14:45	授業①：社会（浦田）	授業②：日本語
	15:00～15:45	授業②：日本語	授業①：社会（浦田）
	15:50～16:00	帰りの会	
二 日 目	8:15	宿舍出発	
	9:00～9:10	朝の会	
	9:15～10:00	授業③：図工	授業④：体育
	10:15～11:00	授業④：体育	授業③：図工
	11:10～12:45	活動：カレー作り（8班）	
	12:45～13:30	昼食 片付け	
	13:45～14:30	授業⑤：英語	授業⑥：音楽
	14:45～15:30	授業⑥：音楽	授業⑤：英語
15:45～16:00	帰りの会		
三 日 目	8:15	宿舍出発	
	9:00～9:10	朝の会	
	9:15～10:00	授業⑦：家庭科	
	10:15～11:00	授業⑧：理科	
	11:10～11:40	レクレーションお別れ会	
	12:00	現地出発昼食 北京日本人学校到着	

私は、これまでの訪問時、図工や日本の遊び、体育などの授業を行ってきた。3年目のこの年は、はじめて社会科に挑戦した。中国語にほんの少し自信ができてきたことや中国の子どもたちに、ぜひ日本の地理について知ってほしいという願いから社会科にチャレンジしたのである。以下の流れで授業を行った。

- 1 世界地図を広げ、日本の位置を確認する。
- 2 日本の気候について知る。
- 3 日本の主な都市のようすについて知る。

子どもたちは、日本の位置をよく知っていた。また、日本だけでなく、米国・ロシア・韓国・英国などの位置もよく知っていた。日本の気候に関わって、災害について写真で紹介すると、地震や洪水などに強い興味を示していた。また、日本の家屋について写真で見せたときには、より強い興味を示していた。この希望小学のある地域はレンガを積んだ家屋が多いので、それとは大きな違いのある日本の家屋に興味を示したのであろう。次に日本の主な都市についてその特徴を写真を使い紹介していった。取り上げた場所は、北海道、東京、新潟、横浜、大阪、四国、長崎、沖縄、我がふるさと鳥取である。北海道、東京、大阪は知っている子どもが多かった。北海道は、実は今、中国からのいわゆる富裕層の旅行客が増えているようである。美しい風景が人気となっているようである。東京、大阪は日本の代表的な都市としてよく知っているようである。横浜には中華街があること、長崎には中国から伝わった祭りがあることを伝えると、子どもたちはとても誇らしげな表情をしていた。

この地理の学習で少しではあるが、日本のようすを知ってもらえたと思う。日本への興味が少しでも高まってく

れたらと思い、実践を終えた。

1日目の活動に続いて、2日目も授業実践を行った。そして授業の合間には、バドミントンなどをして遊んだ。学習中も子どもたちは意欲的に学ぶが、やはり体を動かして遊ぶことが大好きなようである。

2日目の昼食は、子どもたちと私たちがいっしょに作るカレーライスである。材料は現地で購入する。現地では「ガーリーファン」と発音する。中国の子どもたちもガーリーファンが大好きである。野菜をまず切るが子どもたちの包丁さばきはなかなかのものである。希望小学の先生によると、ほとんどの子どもたちが家で料理をやっているそうである。中国は、ここに限らず共働きが一般的である。子どもの世話は、祖父母が行う。



〈学習に取り組む希望小学の子どもたち〉

3日目の家庭科の裁縫でも子どもたちは器用に針を扱っていた。工作でもカッターナイフを上手に使い、細かい作業を上手に行っていた。日本の子どもたちにもこうした日常における体験がもっと必要なのであろう。話は戻るが、カレーライスは手際よくできあがった。8班に分けて作ったがどこも上手にできあがった。子どもたちはよく食べる。本当によく食べる。カレーがなくなってもご飯を食べる子どももいる。逆に日常の栄養状態が心配になるほどである。希望小学のある農村部は、一日数円で生活すると聞いた。1元はおよそ16円である。家のようすもかまどが使われたり、道はぬかるんでいたり数十年前の日本の生活のようすである。貧しいというよりも自然のままの生活がそのまま続いているという感じである。決して豊かとは言えない生活ではある。都市部の豊かな人々は数百元もする料理を食べたりするそうなので、その格差は日本の経済格差の比ではない。農村部から都市部へのかせぎが多くなるのもうなずける。現在の中国の経済的な発展は、こうした農村部の人々のでかせぎによって成り立っているようである。また、近年、都市部の子どもたちの肥満が問題になっているということも聞いた。実際北京市内で見かける子どもは肥満傾向の子どもが多かった。塾通いなどの生活スタイルの変化や食生活の偏り等が原因だろうと学校の中国人スタッフが話していた。中国における経済発展の負の部分が子どもたちの生活にもおよんできているようである。

2日目の夜は、希望小学の先生方や現地の教育委員会の方、青年団の方を囲んでの食事会がある。この行事も希望小学訪問の重要な行事である。中国の慣習としてお酒でもてなしというのは、とても重要なことであると聞いた。こうした親交が、さまざまなことをスムーズにことを運ぶことにつながるらしい。何度も乾杯（本当に杯を乾さなければならない。）するのでお酒の弱い私としては、はじめから断らなければならない、何とも気まずい限りである。でもこの場では中国の教育事情や中国の現実社会のようすを聞くことができ、貴重な国際理解の場となった。

3日目は、午前中に授業とお別れ会を行った。最後のあいさつでは、感極まって言葉につまる教員もいて、感動的な場面であった。子どもたちも3日間の感想を涙ながらに話をしてくれ、惜しみながらの別れとなった。今でも私たちの乗るバスを追いかけながら手を振る子どもたちの顔が脳裏に焼き付いている。

(3) 希望小学訪問こぼれ話

希望小学は都市部からかなり離れたところにある。学校バスに長時間揺られて行くことになる。希望小学のある最寄りの都市までは高速道路がつながっている。中国の高速道路網も近年発達してきているので便利になってきている。ただ、何らかのトラブルが発生することが多い。事故による渋滞、車の故障などである。いつかは過積載のトラックが積み荷の石炭を勝手に自分の土地に下ろしたことに對して憤ったおばあちゃんが道路に座り込みをして

2時間待ったことがあった。こうして立ち往生していると必ずどこからともなく売り子がやってくる。パンや果物を売りに来る。商売とは本来こういうものなのかもしれない。

2泊3日の日程であるので、現地に宿泊した。本来であれば、外国人は宿泊できないホテルに特別に宿泊させていただいた。中国ではホテルにランク付けがあり、3つ星以上であれば日本と同じレベルのサービスが得られる。基本的に星なしのホテルには外国人は宿泊できない。4・5つ星は、いわゆる外資系のホテルである。1年目に宿泊したホテルは、その町で一番のホテルであったが、2日目の朝停電し電気もつかなければ水もでなかった。部屋にあったポットのお湯をタオルに浸して顔を洗った。

3. 希望小学訪問から学んだこと

日本人学校の敷地内にいると、自分が中国にいることを意識することなく生活することができる。逆に、中国にいても生の中国にふれることなく生活してしまうことになる。現地校との交流も年間数回であり、限られた時間や内容である。こうした中で本当の国際理解を深めることは、なかなか難しい。希望小学訪問は、私たちが生の中国にふれることのできる数少ない機会である。こうした機会を得られたことは私にとってとても貴重な経験となった。

実践の中でも述べたように希望小学は貧困農村地域にある。子どもたちの教育環境は、必要最低限のものしか整っていない。しかし、子どもたちはとても一生懸命学習に取り組んでいる。話を聞く、書く、声に出して読むという基本的な学習活動を本当に一生懸命にする。話を聞く目が輝いていた。学びの原点を思い出させてくれる姿であった。教科書も見せてもらった。日本の教科書と比べると紙が薄く、装丁も粗末なものである。日本のように見た目子どもたちを引きつけ、興味を高めようという意図はあまり感じられない。学習のようすを見ると、子どもたち自身の中に学ぶ意欲があると感じられた。北京市内の学校も訪問させていただいたことがある。そこは教育環境が整えられ、日本と何ら変わらない状況があった。ただ、子どもたちの学びへの意欲は希望小学の子どもたちほど感じられなかった。教育環境を整えることが必ずしも子どもたちの意欲を高めることにつながらないのではないかと疑問に感じるところである。補足すると、都市部の教育における競争は年々激しくなっているそうである。

希望小学訪問に関わって、中国の農村部の生活にじかにふれることができたのも大きな経験であった。3年間の訪問の間には、村の中を案内していただく機会が何度かあった。道には牛が寝そべり、豚の親子が歩き、各家庭では、鶏が鳴いていた。かまどが今も現役で使われ、井戸が水源となっていた。こうした生活がゆったりと流れているという感じであった。北京にいますと、近代的な環境の中での生活であったが、こうした生活と全く違う生活が農村部にはあり、これも現在の中国の一つの姿であることを知ることができた。

私たちは、希望小学のある地域の人々にとってはおそらく一生の内に出会う唯一の外国人であろう。そういう意味では、私たちは日本人の代表である。彼らに私たちがどのように映ったのかは分からないが、3日間の交流はとても友好的で和やかなものであった。日本に対するイメージはよりよいものになったと確信している。国レベルの政治的な関係づくりも大切であるが、真の交流とは今回のような交流ではないだろうか。今後もこうした交流が続いていくことを願っている。